

「敵である友, 友である敵 ～戦場ウクライナからの報告～」

2023年8月6日
於・日本基督教団神戸栄光教会の「平和聖日」
(社)神戸国際支縁機構
国際部「カヨ子基金」
佐々木美和



スライド 1: 包囲下にあったイルピンの子どもたち

おはようございます。佐々木美和と申します。平和聖日である本日、私のような未熟な者を呼んでくださり、緊張しています。本日まで、ご準備のご労を取ってくださった神戸栄光教会の佐藤 成美 牧師先生、神戸栄光教会社会委員会 森 章一 委員長 & 森 愛子 書記をはじめ、みなさまにお世話になりました。

神戸栄光教会の皆さまには、原田 洋子 姉妹をはじめ、孤児の子どもたちの里親になってくださっている方々もおられます。国内外のボランティア活動について、大田 厚三郎 大兄、高野 國昭 長老、矢野 寛子 姉妹、柳澤 豊 先生、名前を挙げつくすことができませんが、多くのかたにお世話になっています。この場を借りて御礼を申し上げます。

今朝は、佐藤 成美 牧師先生の説教を聞かせていただき、主を崇めます。感謝にたえません。佐藤牧師先生のご説教を拝聴しながら驚いていました。「寄留者」「孤児」に言及する主のご命令をはじめ、すでにこれから話す内容に触れておられたためです。主がご準備してくださった恵みをを神様に感謝して、本日は、皆さまのむねを借りる気持ちで、なによりも平和の主であるキリストの前にへりくだり、すべてのひとが平和に暮らせる活動について、ご一緒に同じ方向を見つめ機会を分かち合わせていただきます。

目次

目次.....	2
今日話すこと全体についての補足.....	3
1. ウクライナだけが戦場か.....	4
1.1. 8月6日の記憶, 黙とうする大人たち.....	4
1.3. 我と汝の平和の関係と, キリストの平和.....	5
1.3. 現代の「8月6日」に意味はあるか.....	5
2. ウクライナの「戦勝」を希求する現状と日本国内の「ウクライナ」以外移民への差別.....	6
2.1. 少女はバイオリンを弾きながらお金を集め, 戦士は戦場で詩をうたう.....	7
2.2. 自覚をもって冷静に人を殺す戦争が, 現代の特徴.....	10
2.3. 「殺したくない」「ウクライナに栄光あれ」.....	11
3. 隣人は最も弱い立場の人(本田 1990=2003: 155-156).....	14
3.1. 価値両儀性.....	15
3.2. 不正のある一致(偽りの平和)に混乱を起こす.....	16
3.3. 非暴力:みことばの「剣」をもつ.....	16
4. 平和が失われている戦場に.....	18
4.1. 「よそ者に・・・」(マタイ 25 章 35 節).....	18
4.2. 食べさせ, 飲ませ, 宿を貸し, 着せ, 世話をし, 訪ねる.....	19
4.3. 平和が失われた被災地で「石が叫ぶ」.....	19
結論 敵に仕立てあげられている友, 最も小さくされた隣人とは誰か。平和とはキリストと弱い立場 に一致し行動を起こすこと。.....	23
参考文献.....	23

今日話すこと全体についての補足

※レジュメは戦地における個人情報知られると窮地に立つ人物たちが出てきますので、最後に回収させていただきます。オンラインで聴いてくださったかたも、戦地における個人情報の関係上、パワポ資料の拡散をせず、ご視聴くださいますよう、お願い申し上げます。

なににいのちをかけますか。

キーワードに、二元論。人間に「剣をもたらす」のではなく、偽りの平和、二元論に剣をもたらすこと。

敵味方に区別し、ウチとそとにわけ、差別していいものと愛する側とに分ける二元論。二元論に基づく偽りの平和を打破するために、私は偽りの平和にキリストならば「剣をもたらす」だろう視座から話したいと思います。平和の実現には、キリストが神との和解と貧しいひとの解放にいのちをかけてくださったように、私たちも、ある場合、いのちがけで、抑圧されたひとびとに接する覚悟が求められる場合があります。宗教者だから神様に委ねつつ、弱った人々に寄り添う挑戦を試されてきました。

- 日本における二元論的志向性とその打破としての聖書
大手メディアの報道、隠される情報 二元論的志向性←→思考(考える力)
情報の発信源への追究、懐疑(≒考える力)
- 聖書における正義:抑圧されたものの解放

現在、(社)神戸国際支縁機構国際部「カヨ子基金」の代表をしています。なにももたいしたことはできていません。突然の自然災害、戦争・紛争の地からのうめきに反応し仕えるため、親を失った孤児たちに、カヨ子基金で学校に行けるように里親を募集しています。そして、なにももかも失った子どもたちに、孤児の家を建てています。

現地へ赴き、直接、孤児と顔と顔を合わせます。行政、福祉、親族家族とのつながりを持たない天涯孤独の孤児に里親を希望されるかたは、日本から毎月 3000 円の支縁を送っていただいています。

神戸国際支縁機構が社団法人になった最初から、日本基督教団神戸栄光教会は、応援して下さっています。皆さまのお支えがなければ、継続して行くことはできませんでした。

泣いている 孤児
笑顔に

Kayoko Fund

「カヨ子基金」に
あなたの心を注いで

もう泣かない

2016 年から、「カヨ子基金」は国境を越えて、孤児、夫をなくした独身女性、高齢の独居者や難民の呻きに寄り添ってきました。

現在、10 か所以上の地域で「カヨコ・チルドレン・ホーム」が現地の人たちで運営されています。同じ境遇の 5 人ほどが大人になるまで、日本の里親からの毎月、3 千円のご支縁によって学校に通います。

ゆうちょ 記号 14340 番号 96549731

お問い合わせ
〒655-0049 神戸市垂水区狩口台 5-1-101
「カヨ子基金」<http://kisokobe.sub.jp/agreements/9703/>
☎ 080-4267-4820 miwa.kayokofund@gmail.com

スライド 2: 孤児への里親支縁の方法チラシ

1. ウクライナだけが戦場か

このたびの副タイトルに、戦場ウクライナからの報告、**とあります**。ウクライナだけが戦場なのでしょうか。日本は**平和な**といえるのでしょうか。まず私自身の自己紹介から始めて、平和について考え始めたいと思います。

1.1. 8月6日の記憶、黙とうする大人たち

本年の平和聖日は、8月6日にあたっています。平和について私の個人的な原風景から語らせていただきます。

8月6日と聞くと、私にはある光景が浮かびます。幼稚園の頃でしょうか。夏休みは一人で広島の方にある祖母のところに泊まっていたものでした。ある日、そのときは両親の家に行きました。丸テーブルに座って、父と母と朝食を目の前にしていました。不穏なサイレンが鳴り響き、母は黙とうを勧めました。「黙とう」という女性のか細い声でアナウンスが不気味に流れ、母も父も目を閉じ下を向いて、黙りこくっています。いつまで続くのだろうと思っていると、そのうち日常が戻りました。私も、私の父母も、祖父母も、曾祖父も、どこまでさかのぼれるかわからないほど、私の家系は広島で生まれ、育ちました。8月6日のサイレンは、どこでも鳴るものだと思っていました。大学進学で関西に出てきて初めて、8月6日に花火大会をしていることを知りました¹。逆に、6月23日は沖縄の地上戦終結の日として沖縄ではサイレンになります。しかし、本土の一部である広島では鳴りません。

私は恵まれた環境で育ちました。しかし、私が大学に在学中に、ぼっきりと、お金の出どころは親に頼ることができなくなりました。親がリストラの波を受けたのでしょうか。水商売でもしなければ、大学を卒業できないなあ、と思い、キャバクラのようなところの面接に行ったこともありました。学費を払うために

¹ 広島では歴代、8月6日に花火大会は行われぬ。近隣の県では行われている。8月6日が土日にあたったとしても花火大会が行われることはなかった。

は、一番時給(タイムパフォーマンス)に依存せねばならないところまで追い詰められていました。面接で訊かれた唯一の質問は、「化粧は？」ということでした。他は不問。雇用主に「みんな初めてだから」と言われ、即採用されました。採用されましたけれど、すぐに別のバイトの道がみつかりました。私は、大学まで恵まれすぎていたので、経済的に厳しい経験をしてしかるべきでした。

1.3. 我と汝の平和の関係と、キリストの平和

経済的に恵まれてたとはいえ、家庭環境の中でいろいろなことが重なったことを通じて、キリストに出会いました。自分がこの世で一番かわいそうな悲劇の主人公、迷える羊だと悲劇のヒロインでした。そしてキリストのことばに出会いました。キリストを信じたのは、キリストのことを伝えた人物が信頼できる人間だと思ったからでした。平和とは、ただ神と自分との個人的な関係、ただそれだけだと思っていました。こうして私は13歳のころ、西洋、特にアメリカ式のキリスト教に加わりました。

いや、ほんとうは、キリストがわたしを受け容れてくださったように、すべてのひととのキリストとの平和な関係が、招かれていることを知りました。それは、たんに内面の信仰にとどまらないということが、徐々に聖書を通じて示されました。

本日は、平和聖日。平和とは、キリストです。幼い時には気づきませんでした。自分中心のキリストの平和は、かわいそうな私と神とのぬくぬくとした個人的関係だけの問題ではなかったのです。

神戸で週に一度、道に住む路上の生活者のかたのところへ行きます。お弁当をつくってくださるのは、2014年炊き出しを始めた時から家族のようにおつき合いしている別の路上の生活者のかたです。いまはおうちに住んでいらっやいます。広島でも、幼い時から、ぬいぐるみをたくさん連れて歩いていた路上の生活者のおじちゃんを目にしていました。ビッグイシューも、広島の繁華街で目にしていました。なんとなく、私はそれらのおじちゃんたちと、会話を交わせないものかと、幼い時から思っていました。皆さんもそのような出会いはございせんか。

父も母も、得体が知れない人には近づかないようにと私を諭しました。親心からでしょう。私がキリストに出会ったあとも、母はすぐに人を信じやすい私に釘を刺しました。母はクリスチャンでもあります。私は混乱しました。なぜ、善良そうに見える、8月6日に黙とうを励行する律儀な大人たちは、子どもの小さな正義感で考えて正しいと思える行動を、こうも止めるのだろうか。直観的にも思わせられるのは、キリストの平和とは、路上で生活しているかたとも、分け合うべきものではないのだろうか。口答えをしなくても、内心ずっと思っていました。

1.3. 現代の「8月6日」に意味はあるか

比較的不自由なく育った私が、幼稚園のころの8月6日の黙とうの光景を今でも明確に覚えています。子どもながらに不思議に思ったからでした。大人が、こうも真面目に、サイレンの前で黙とうをする光景を奇異に思いました。言語化はできていなかったものの、常日頃、経済を気にしてあくせくと働く大人たちが、静止している対照的な姿は、妙なものでした。幼稚園児の幼いときでも、印象に残りました。いつも仕事に明け暮れている大人たちが、休日の朝から、なんの得にもならない黙とうをしている。損得につながらない、無意味で、しなくてもよさそうな黙とうを、サイレンの指示にしたがってまるで子どものように素直に黙とうに集中している。両親の姿を見て、私は驚いたものでした。どうやら黙とうとは、「8月6日」という日というのは、大人も時間を惜しまず割くらしい。おそらくこれが、私が8月6日を目の前に静止する大人に出会った初めてのときだったでしょう。形ばかりとはいえ平和を覚え死者の前に向き合おうとしている社会を目の前にした初めての「時」(カイロス)でした。

いまでも、私は、未熟者です。現在、私を含め大人は、真面目に戦争の犠牲者に向き合っているでしょうか。そもそも、過去のものだと思っていないでしょうか。日本の中でも、外でも、キリストの平和は実現していません。

8月6日の原子爆弾投下の背景はいますべての戦争と抑圧とヒエラルキー(位階制)と地続きです。当時は日本が「悪い」国で、やっつけられるべき対象でした。アメリカが原爆を用いて日本の悪をこれ以上許さないという手段をとったという判断を耳にすることがあります²。

大人になった私たちは、いま、人殺しの正当化をどう考え、はたして正当化できる根拠をもっているでしょうか。日本は既に立派な戦争加害者になる準備を始めました(『朝日新聞』2023年6月1日付)。今年、5月に、広島にゼレンスキー氏が来ました。平和外交とは敵を倒す成果を上げるものではないはずです。広島での会議は平和ではなくウクライナが各国から軍備支援を得る外交でした。ゼレンスキー氏が「敵」をやっつけるために、岸田首相は武器を供与してほしいかと直接的に持ちかけ質問しました。戦争推進の会話です(『産経新聞』2023年5月21日付)。皆さんは、テレビを見ながら為政者をよくやったとたたえたでしょうか。ヒロシマの被爆地は岸田文雄首相のアピールの場として利用されました(『神奈川新聞』2023年1月20日付)。核もトップダウンで政策が決められます。被ばくした市民の声、核廃絶は黙視されました。広島(軍都)でのG7もわかりです。私たち日本在住の人間が直視すべき戦場はウクライナだけではありません。ところが日本の大手メディアは繰り返し、スーダン、パレスチナ、コンゴなどを無視して、ロシア・ウクライナ戦争の一進一退を連日、報道します。まるで、ウクライナが戦争を停止させたいと望んでいるかのような偏った報道です。私が5回ウクライナを訪問してはっきり言えることは大人も子どもも停戦をのぞんではいません。望むはただ一択、戦勝です。

2. ウクライナの「戦勝」を希求する現状と日本国内の「ウクライナ」以外移民への差別

これまで5回、ウクライナに赴きました。孤児の家建設のためです。ロシア軍側に占領されたイルピン、殺戮のあったブチャ、首都キーウ、ザポリージャ原発やカホフカダムなど、ジャーナリストですら入れない最前線を訪問しています。第5次ウクライナ・ボランティアから6月24日に帰国しました。

² 今年8月11日公開の映画「バービー」にかんする物議について、日本のメディアが取り上げている。一方で、アジア各国の留学生においては、原爆にかんする日本の「被害者意識」に白い眼を向けていることも補足しておきたい。日本による植民地政策を棚に上げ、被害者意識だけを記憶する日本にたいしての批判だといえよう。



- 5月28日～6月13日
- 8月3日～12日
- 9月30日～10月7日
- 2月10日～17日
- 6月11日～24日

スライド 3: 第1次～第5次ウクライナ・ボランティア日程³

2.1. 少女はバイオリンを弾きながらお金を集め、戦士は戦場で詩をうたう

第1次ウクライナ・ボランティアで、既に、子どもも大人も戦勝を渴望する言葉にならない空気を感じていました。戦時下とは思えない建設ラッシュ、若者たちのアミューズメント、高級車が走っている首都キーウ(キエフ)を歩きました。そのとき、バイオリンを弾いていた少女がいました。



写真 1: バイオリンを弾く少女と弟。通りに戦争募金の箱(2022年6月6日)

弟がそばに座っていました。そばにはお金を入れるための箱が置いてあり、「戦争募金」と記してありました。

³ それぞれ、「カヨ子基金」ホームページ上で報告を掲載。国内での活動に関する報告記事も含む。ほか、第1次、第2次や第5次の内容は『クリスチャンプレス』、『クリスチャントゥデイ』、『中外日報』、『文化時報』などでも詳細を読むことができる。



スライド 4: 第1次ウクライナ・ボランティア写真(2022年5月28日～6月13日)

戦時下では、停戦・終戦への願いは、子どもも口にできません。

同、第1次ウクライナ・ボランティアで、男性Aさんの家族とも親しくなりました。Aさんが案内してくれたことにより、包囲下にあったイルピンと、同じくロシア軍による住民の虐殺があった近隣の町ブチャを訪れることができました(写真2～4)。



写真 2: 爆発により損壊したイルピンへ至る橋
(2022年6月3日)



写真 3: イルピンの一般住居
(2022年6月3日)



写真 4: イルピンの街並み(2022年6月3日)

第2次ウクライナ・ボランティアでも、第3次でも、Aさんに案内してもらいました。Aさんにクリスマスと新年の挨拶を送りました。いつもは即座に返ってくるAさんからの返信が、ありませんでした。6日後、Aさんから次のような返信がありました。

ミバさん ありがとうございます。クリスマスもおめでとうございます。あなたの幸福と健康をお祈りします。我々は良いです。先ほど返信できずに申し訳ありませんが、私はウクライナ軍に召集されました。そこではいかなる接触も禁止されています。私は今クリスマス休暇を2日間取っており、その後軍隊に戻ります。

.....

この大変な時期に、お祝いの言葉をいただき大変嬉しく思います。ありがとう、頑張ってね

私はこのメッセージを見て思わず涙を禁じえませんでした。第3次ウクライナ・ボランティアで案内をしてから、1週間も経たないうちに、徴兵されたと推測できました。

2日後、彼が軍にもどる日になりました。直前、メッセージが届きました。

もし、私が彼の立場なら、同じことを、藁にも縋る思いで、口にしたらろうと思います。

ミワさん、日本に行くことは可能ですか？人を殺したくありません。

.....

殺されそうな気がする

彼は「殺したくない」とつぶやきました。数日後、「殺したくない」とつぶやいた彼は「ウクライナに栄光あれ」と言い換えました。

2023/01/13 21:18

ご支援ありがとうございました。……すべてはうまくいきます、私たちは間違いなく勝ちます。ウクライナに栄光あれ。

戦禍の国では、停戦交渉、言葉による交渉という人間的手段は、人々の頭から意図的に取り除かれているようであり、死語です。

2.2. 自覚をもって冷静に人を殺す戦争が、現代の特徴

ノーベル賞を受賞したウクライナとベラルーシ人を両親に持つ作家がいます。彼女はスヴェットラーナ・アレクシェーヴィチ氏。第2次世界対戦時のウクライナ国内の戦渦を女性の視点から描きました。彼女はロシア側ともウクライナ側とも友人関係を持ち続けている稀有な人物です。ウクライナ・ボランティアで出会ったウクライナ人は全員、ロシアにいる友人たちと絶縁しました。

アレクシェーヴィチ氏は、ウクライナがかつてソ連だった時代に語られた戦争の姿を「人間の心を支配してしまう」と形容します。殺人の様子が詩のように語られた、と。

現在のロシア・ウクライナ戦争について、「信じられ」ず、「それなら言葉はなんのためにあるのか」と問うています。



朝日新聞 2023年1月1日付 第1面

私はかつて取材した人で、「戦争は美しい」と言った男性をよく覚えています。彼は「夜の野原で砲弾が飛んでいる姿はとて美しい。殺された人間だけじゃない。美しい瞬間があるんだ」と言うのです。のどを刺すときの(刺された人の)うめき声について、ほとんど詩的と言ってもよい表現で語りました。戦争には人間にとって様々な試練があります。人間の心を支配してしまうようなものがあるのです。

私の母はウクライナ人、父はベラルーシ人です。開戦を知った時、ただただ涙がこぼれました。私は本当にロシアが大好きで、その文化の中で育ちました。ロシアに友人も大勢いるのです。

——ロシア人と交流を続けているのですか。
はい、知識人たちは皆連絡を取り合っています。一般の人たちも、可能な人たちとは、より難しいですが。

(戦争が始まるなんて)信じられませんでした。それなら言葉はなんのためにあるのだろう。本当に重要なのか。なぜ言葉はこうも速く消えてしまうのか。

スライド 5: アレクシェーヴィチ氏

6月に出会った私たちの兄弟、あのイルピン出身のAさんは、戦場にもどったあと、戦地からの様子をまるで詩のように、ポエムのように伝えてくれました。前線で待機しているとき、たたずんでいるとき、鳥の音が聞こえる、と。

佐々木小次郎と宮本武蔵の逸話を知っている方もいらっしゃるでしょう。対決する際に、武蔵はトンビが鳴いていることを指摘し、小次郎は鳴き声が聞こえませんでした。勝者は武蔵でした。鳥の声が聞こえているほど武蔵は冷静だったという逸話です。

ウクライナでは、知識人は徴兵されません。Aさんのような一般のウクライナ人が、子どもを持つふつうの父親が、徴兵されます。〈敵〉を冷静に人を殺すように訓練されます。軍人と軍人の戦い、武士と武士の戦いではありません。未婚の女性や高齢独居の女性たちは軍での必要品を作るなどして支えています。18歳～60歳男子全員が昨年2月以降、徴兵対象となりました。激戦の東部へ行くことを拒否できません。中には65歳を過ぎていても徴用されています。逆らうことなど許さないエートスがあります。命を粗末に扱われるのはごく一般のひと、末端のひとびとです。キーウ在住の知識人が説明してくれたことがありました。東部の方が前線に近い地域だが、中心部のキーウの方が、守られていると。中央は迎撃ミサイルの性能がいい。東部地方は前線だが、性能が高い迎撃ミサイルは地方に回されない。説明した知識人は生まれも育ちも中央政権のキーウです。地域格差、いのちを天秤にかける〈冷静さ〉が身についているようです。

ウクライナが被害者だと日本では報道されているのではありませんか。被害者と加害者の話ではなく、国と国同士の戦争の話です。むしろ、ひとびとをおもんばかった非暴力運動が、平和運動に押し出される停戦交渉がなぜ今、日本から発信されていないのでしょうか。戦争が続く中で、一番苦しむのはなんの権力も持たない、権力側からは、いてもいなくてもいいと切り捨てられるにんげん、孤児たちや、障害者や、女性たちです。私は申し上げたい。歴史から弱い者たちが常に犠牲になってきたことを思い出していただきたい。

戦場に戻って数か月して届いたAさんからのメッセージには、こう書かれていました。「私は別の人間になりました」。

2.3. 「殺したくない」「ウクライナに栄光あれ」

ウクライナを訪問するたびに、ウクライナ側のロシアに対する文字通り「殺してやりたい」という敵対感情を見聞きました。

6月に訪問した第5回目での体験をお分かちします。「ロシア人を殺してやりたい」という感情が倫理的に反していることは、頭では「わかって」いると、口にしたひとに出会いました。ザポリージャを案内してくれたBさん。34歳の彼は被爆2世、チェルノブイリ原発事故から生き残りました。父親は消防士としてひとびとのいのちを救った後、若くして世を去りました。「戦勝」の空気が圧倒的に覆っているこの戦争当事者ウクライナ国で、これまで5回訪問したうち、初めて、「殺してやりたい」という感情が間違っていると口にした人物でした。彼はウクライナのマジョリティの若者とことなり、超越者への信仰を持っておられるスピリチュアル⁴主義者でした。

⁴ ここでいう「スピリチュアル」とは「オーラ」や「占い」などの日本国内独特のイメージと異なる。超越的存在を信じている意味を含めた宗教用語として用いた。無神論ではないが特定の宗教に属さない信仰者である。

ЖИТТЯ ПОЗА ОФІСІМ
FROM JAPAN WITH LOVE



Конічива, друзі! Влад Рибалевський на зв'язку. В один із вечорів п'ятниці я отримав дзвінок від знайомої волонтерки: "Влад, салют! Як у тебе з англійською і з вільним часом? Завтра в Запоріжжя приїжджають волонтери з Японії, хочуть побачити рашинські злочини, в тому числі і наслідки підриву Каховської ГЕС. Треба організація і супровід." Я без вагань погодився.

Але у нас був план Б - ми поїхали до селища Вицетарасівка, що біля Каховського водосховища. Голова громади пан Олександр (на фото у чорному) радо нас зустрів.



Ми побачили обмілиле водосховище, мешканці громади, які поки що не уявляють як житимуть далі без води.



Наступного ранку я зустрів Йошіо Івасуму (на фото праворуч) - керівника Організації Міжнародної Підтримки японського міста Кобе, та його доньку Міву (ліворуч), яка також працює в Організації...




Їх Організація переслідує 2 головні мети:

1. Надати матеріальну підтримку дитячим соціальним закладам для дітей, що осиротіли внаслідок російського...
2. Погодити економічні зв'язки між Кобе та Україною, здебільшого в ІТ галузі.

Селище обстрілюють, тому у нас було 5 заклики на з'явку з берега, бо після нас буси можуть лобачити з дрона і відпрацювати артою (на їхньому березі ворожі позиції).

Було хвалюване: хочеться, щоб у дійсності з'являлись нові формати і побачили, що це взагалом не Політес.

Замість висновків. Японці - це нація практичних та скромних мінімалістів з майбутнього. Більшість з них тільки починає відкривати для себе Україну. Наше завдання допомогти їм із цим, щоб розширити гуманітарну та економічну взаємодію.

Тому ми і нові друзі поїхали з собою захоплюючись на їхній першій Запорізькій

Слайд 6: B さんによる第 5 回ウクライナ・ボランティア報告

文 化 時 報 2023 年 (令和 5 年) 7 月 14 日



**岩村牧師がウクライナ訪問
現地の司祭、戦後危惧**

神戸国際支援機構
編者 岩村 聖一 (神戸国際支援機構)

ロシアのウクライナ侵襲について語る岩村牧師 (左) とホスト司祭

岩村聖一神戸国際支援機構編者(左)とホスト司祭(右)の対談。岩村牧師は、ウクライナ訪問後、現地の司祭と対談し、戦後の危惧を述べた。司祭は、ロシア軍の進軍に驚き、戦後の状況を憂う。岩村牧師は、日本の教会がどのように対応すべきかを話し、互に理解を深めた。

記事 2023.7.14 文化時報

神の愛を実践せず殺し合う政治が
どのようなキリスト者にも挑戦され突きつけられている

スлайд 7: 現地の宗教者による戦後への危惧

同じく超越者への信仰を持ち、それどころか、主への信仰を持っているブチャの司祭にも、同じく6月の5回目のボランティアで出会いました。殺戮を経験したブチャの司祭は、日本から来た私たちを礼拝前から歓迎してくださいました。礼拝後も、**なにも**尋ねていないのに、次のようなことを言われました。「ロシアを倒す」。海外からの初対面での客人に対してでさえ、「ロシア軍を許さない」と、発するほど、敵意を露わにしています。さらに「ロシア軍が家族のもとにやってきましたら喜んで応戦する」。

「汝、殺すなかれ」。この言葉は、人が作り出した戦争の前では、信仰者も、司祭も、聖職者も、無視できるようです。

第1次ウクライナ・ボランディアのときから一貫して、世論レベル、市井の空気感として感じ取りました。大人も子どもも「戦勝」のみを口にする空気は停戦交渉には至らせないとする政治の心情操作かと思わざるを得ません。

皆さん、私が感じているおそろしさ、やるせなさ、なにより悔しさを共感していただけることでしょう。私たちは、自覚しなければなりません。自分達が本当は人殺しの傍観者であり、いや、むしろ傍観することで人殺しに加担していることになりませんか。多くの日本人は戦争の現状を少し驚きながら遠巻きにながめ、ひとまず日本にやってきたウクライナ避難民を応援している。ウクライナ避難民はみな、停戦を望んでいません。望んでいるのは「戦勝」です。私たちは戦争を望んでるひとびとを支援するのでしょうか。支援されればウクライナ人は戦争を継続するしかありません。戦争で命があやぶまれているウクライナ人に感情移入し同情するのは結構です。しかし、将来の顛末についてよく考えた上での好意でしょうか。人殺しに加担することにつながると考えられないでしょうか。

およそ50年前を思い起こしてください。私たちは、ベトナム戦争中、またその後に平和運動、非暴力運動を展開した世のはたらきを忘れるべきではないのではありませんか。人殺しの剣ではなく、みことばの剣をもって、はっきりと断言すべきではありませんか。まず戦争をいかにして終わらせることができるか、なぜ人間らしいことばで交渉する術を、はじめからないもののようにしているのでしょうか⁵。

知り合ってから始めて私に「殺したくない」と連絡をしてくれたAさんが、即座に「ウクライナに栄光あれ」と言い換えたことを思い出してください。仲間のがわのヒエラルキーの頂点に立つ者が、彼を徴兵する権利をもち、人を殺すはたらきに起用しました。頂点に立つものは、自らは動きません。しかし、従う国民は自国のためにいのちを捧げる。自国のために。自国。内側のために。内側で一致し、固まっている。うちとそと。二元論。

学校の図書室の本は半数が戦争についてだった。村の図書館でも、父がよく本を探しに行った大きな図書館でも。学校では死というものを愛するよう教え込まれた。××のために死にたいという作文を書いたものだった。何か憧れのようなものだった…

『戦争は女の顔をしていない』p.1

現在のウクライナの内側は、戦に勝つことだけを希望にかかげ、ふつうのひとたちが、「殺したくない」という言葉を口にするこもはばかり、「ウクライナに栄光あれ」と言い換えています。

ところで、聖書には次のように書かれています。

主はこう言われる。公正と正義を行い、搾取されている者を虐げる者の手から救いなさい。寄留者、孤児、寡婦を抑圧したり、虐待したりしてはならない。無実の人の血をこの場所で流してはならない。

⁵ 一ノ瀬泰造の写真によるベトナム戦争の告発は、平和運動とその後のベトナム戦争終結に大きく寄与したといえる。非暴力平和運動の成功例の一つとして重要だといえよう。本文で参照したチェノウエス（2022）は市民的抵抗としての非暴力運動についてデータをもちいて述べている。

隣人，キリストの友は最も弱い立場の人 (マタイ25章35節～40節；本田1990=2003: 155-156)

エレミヤ22章3節

主はこう言われる。公正と正義を行い、搾取されている者を虐げる者の手から救いなさい。寄留者、孤児、寡婦を抑圧したり、虐待したりしてはならない。無実の人の血をこの場所で流してはならない。

スライド 8: 「隣人，キリストの友は最も弱い立場の人」

3. 隣人は最も弱い立場の人 (本田 1990=2003: 155-156)

ウクライナ避難民を，日本はこころよく受け容れています。

戦争のない平和な国である日本に受け入れるというイメージでしょうか。「平和だ、平和だ」と、謳う偽預言者の姿を私は思い浮かべます。まるで国内には戦場がないかのようです。

今年，2023年6月9日，静かに入管法「改正」案(改悪案)が可決されました。メディアは黙殺。ウイシュマさんが死亡した2021年と比較して，報道は皆無と断言してもいいほど，**ひとびと**の目を引きませんでした。法案により，難民・移民は自国へ強制送還される確率は引き上げられました。自国で命を狙われている活動家など日本に在住する外国籍のひとびとの権利が抑圧されています。安全を求めて日本にやっと来ても，日本国内において犯罪者のように扱われます。強制送還されると祖国で粛清されます。日本に留まっても働く権利を持つことも許されません。のたれ死ぬがままになることを入管は望んでいるようです。外国籍であれば，死ぬことに無関心でいいものでしょうか。神様以外に，生殺与奪の権を行使してもよいという根拠はどこにありますか。

〈日本国家の国民である日本人をまず守るべし。それ以外の人間，移民・難民は勝手に入ってきた。だから勝手に野垂れ死ねばよい〉。〈ただし，ウクライナは応援します〉。線引き。線引きのこちら側とあちら側。**内と外**。二元論。

「友」と「敵」という二元論。**ひと**は「敵」を作り出す。ひとは「友」のためになら容易に命を捨てる。「敵」ならばいのちをかけて殺すことは正当化されるか。

メディア，あるいは，政官財学メディアが作り出している敵は誰か。すなわち，「われわれ」意識で敵をなぶり殺すために**なに**がなされているか。敵を倒すために**なに**が実現されるのか。

現在ウクライナ戦争で作り出されている敵は誰か。その裏で起きている現実は何なのでしょう。「こいつは人間じゃない」。人間じゃないものとして，すなわち〈敵〉としてみなすとき，人間らしい言葉は喪失しイデオロギーが勝利します(ジャック・エリュール⁶)。

⁶ ジャック・エリュールはフランスの神学者，哲学者。『技術社会』『アナキズムとキリスト教』など。自身はキリスト者アナキストとして既存社会を鋭く批判し変革をうったえるだけでなく行動した。

3.1. 価値両義性

「友」と敵について、マタイによる福音書 5 章 46 節とヨハネ 15 章 13 節の両方を考えましょう(価値両義性)。

ヨハネ 15 章 13 節

友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。

マタイによる福音書 5 章 46 節(以下 43~48 節)

43 「あなたがたも聞いているとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と言われている。

44 しかし、私は言う。敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。

45 天におられるあなたがたの父の子となるためである。父は、悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。

46 自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあるか。徴税人でも、同じことをしているではないか。

47 あなたがたが自分のきょうだいにだけ挨拶したところで、どれだけ優れたことをしたことになるか。異邦人でも、同じことをしているではないか。

48 だから、あなたがたは、天の父が完全であられるように、完全な者となりなさい。

ヨハネ 15 章 13 節では「友のためにいのちを捨てる、これ以上に大きな愛はない」と言われています。一見、敵をも愛するように、とは友を愛するという命令とは、一見矛盾しているかのように解釈できないでしょうか。マタイ 5 章 46 節では「自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあるか。徴税人でも、同じことをしているではないか。」と述べられています。

世でいう「友」は、愛してくれる**ひと**のことを指すでしょう。しかしキリストの「友」とは、あなたのことを愛してくれる**人**ではありません。誰の友となるかは、あなたがキリストの友となるかどうかです。そうすればキリストもあなたの友ということになります。そして、キリストとは、最も小さくされた側の兄弟にしたことを自分にしたことと述べる**人**です(マタイ 25 章 40 節)。社会が、敵とさだめ、殺人の正当化がされてしまう対象となってしまう**ひと**、社会で周縁化されている**ひと**こそが、キリストの友であり隣人です。キリストの友である**ひと**なのに社会で敵のように扱われている**ひと**をこそ、私たちは世の価値観から目を醒まして、キリストを愛し命を捨てるように、愛するべきです。

しばしば、この日本という国において、殺人の正当化がされてしまう対象は、普段から抑圧され、さげすまれている底辺**の人々**です。社会から敵とみなされた人権を軽んじられている人々が日常的に差別され、抑圧され、さげすまれているならば、そのひとはあなたの「隣人」である可能性が高いのです。

隣人とは誰でしょうか(本田 1990=2003: 155)。隣人とは、あなたを愛してくれる家族や友人のことを指した言葉ではありません。隣人を愛せよとの掟が引用されたレビ記(19: 9-8)では、具体的に隣人とは誰かを指し示しています。『『貧しい者』(貧者)、『寄留者』(外国人労働者)、『雇い人への支払い』(労働問題)、『耳の聞こえぬ者、目の見えない者』(障害者)、『不正な裁判』(人権問題)、『すべて社会の中で弱い立場に追いやられた人々を挙げ、その要約として、『自分自身を愛するように隣人を愛しなさい』』と結ばれています(本田 1990=2003: 155-156)。

先ほどのマタイ 5 章の箇所にもどりましょう。マタイ 5 章 44 節「敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい」のあと、マタイ 5 章 46 節は次のように続きます。「だから、あなたがたは、天の父が完全であられるように、完全な者となりなさい。」

完全な者とはなんのでしょうか。〈隣人を愛し、敵を愛し、完全なものとなれ〉。平和、シャロームとは、傷のない状態、完全な状態を指します。

隣人を愛し、敵を愛し、傷のない完全な状態になること、傷のない完全な状態すなわち平和を実現するとはどのようなことでしょうか。「隣人を愛し、敵を愛」することです。隣人と敵を愛すれば、分裂がなく、一致することになります(本田 1992=2003: 119-123)。言うは易し、行うは難し。欠けたところのない状態、シャローム、平和の実現です。

ところが、偽りの平和でもある部分のひとつとは一致をすることができるのです。偽りの平和を打破し、キリストの平和を実現するためにはどうすればよいのでしょうか。

3.2. 不正のある一致(偽りの平和)に混乱を起こす

自分の我を捨て、捨て身になり、天の父が完全であるように完全である道、すなわち「友」のためにも自分の敵のためにも真の平和を築く道は、なんのでしょうか。このまま敵と味方を分けて戦争を続けさせる構造の中に居続けることですか。むしろ偽りの「平和」に「剣」をもたらし「敵対」を起こすためにきた(マタイ 10 章 34-35 節)、というキリストの言葉は、うちとそとに分け隔てるその差別を打破し混乱を持ち込んでくださっています(本田 1992=2000: 119)。

平和について、欠けたところのない完全な状態と述べました。キリストが「天の父」のように「完全な者となりなさい」(マタイ 5 章 46 節)と述べたように、キリストが天の父とご自身とを指し「私たちのように」「一つとなる」を示した箇所があります(ほかヨハネ 17 章 11, 20~21, 23)。敵と隣人、友と敵と分け隔てず、一方を区別し抑圧し一方を愛するということをせず、分裂でなく一致をもたらすことです。平和(シャローム)と、一致するとは(注:※個が融解した一致ではない。「全体主義」を連想する一個の個体とは異なる意味)⁷、一致と天の父のように完全になるということは、切っても切り離せない関係であることがわかります。

キリストの平和は状態ではありません。「共に低く下ったところから働く」一致であり、行動、「生き方」です(本田 1992=2000: 123)(ヨハネ 14 章 10~12 節(10 章 37~38 節))。

3.3. 非暴力:みことばの「剣」をもつ

天の父が完全であるように完全である道、すなわち、社会が敵として作り出した隣人のために命を捨て真の平和を築く道は、なんのでしょうか。

このまま敵と味方を分け隔て続け、戦争を続けさせる構造の中に居続けてよいのでしょうか。むしろ争いを起こすためにきた、というキリストの言葉は、うちとそとに分け隔てるその差別を打破し混乱を持ち込んでくれるのです(本田 1992=2000: 119)。

それは敵と味方に分け隔て傷つけ合う状態から完全になる第一歩、平和への第一歩です。広島で行われた G7 にキリストがいたならば予定調和は崩れ混乱が生じたでしょう。利益を目的としたいつわりの一致、同調圧力、敵と友に分け隔てている隠れたイデオロギーを打破しキリストの平和を実現すること、これが、この世の中で私たちが行動すべきことではないでしょうか。

人殺しの剣ではなく、みことばの剣をもって、私たちは非暴力的抵抗を示すべきです。

⁷ 全体主義については、ハンナ・アーレントのすぐれた著作『全体主義の起源』がある。

主はこう言われる。公正と正義を行い、搾取されている者を虐げる者の手から救いなさい。
寄留者、孤児、寡婦を抑圧したり、虐待したりしてはならない。無実の人の血をこの場所で流してはならない。エレミヤ 22 章 3 節

「剣をとるものは剣によって滅び」ます。

敵と味方に隔てるイデオロギーを打破することからはじめましょう。旧約の時代に一人で声をあげた預言者のように私たちも語らなければなりません。

今起きている二元論はなんなのでしょうか。敵と味方に分け隔てさせるイデオロギーにはなにがあるのでしょうか。

ウクライナを訪問するたびに、私には、「殺したくない」と言っていた兄弟の言葉がうかぶのです。非暴力的抵抗で「血を流すほど」、訴えていない。戦争をやめることを、本気で考えていない、敵を敵とし、ひとくりにし、その内部で抑圧されているひとについては考えていません。ただ戦争を続けることだけが現状で進む国際会議。戦争に勝つことだけを望んでいる現場。

非暴力はそんなに力がないのでしょうか。

チェノウエス著『市民的抵抗——非暴力が社会を変える』においても、「非暴力行動は弱い、受け身の行動である。」といった非暴力抵抗運動についての一般的な意見が紹介されています。

- もっとも速く解放に至るのにもっとも頼りになるのは暴力だ。
- 非暴力抵抗は行き過ぎた不正義に対しては無理があり効果もない。
- • •
- 運動が勝利するのは、用いられる闘争の技術が何かにかかわらず、その目的が正しい場合である。

ところが、チェノウエスによれば、1900 年～2006 年までの約 100 年強のあいだ、さいてい千人が参加した政権転覆のレベル、分離独立のレベルでの非暴力大衆運動事例のうち、非暴力抵抗に訴えたキャンペーンの 2 回に 1 回以上が、成功したといえます。暴力的抵抗の成功率は約 25 パーセントでした。

結果は政権の特徴、国の構造に左右されませんでした(統計的回帰分析)。構造的な要素、地理、富、軍事力、人口構成などいかににかかわらず、非暴力キャンペーンが暴力キャンペーンより成功していました。

現代の運動の特徴には、規模が、歴史上の運動よりも小さいということがいえるといえます。そして、現代の運動は、他の非暴力行動の方法よりもデモに頼っている、とチェノウエスは述べる。デモという、抵抗運動の象徴的な明示は必ずしも有効でないことがいえます。しかし、他の非暴力の方法があります。「大衆による非協力」です。新自由主義社会においては、カネがものをいうということは、大衆にとっても、権力者にとっても同様のようです。「たとえば労働停止、退場、波状スト、ボイコット、ゼネストなど」により、有効に抵抗運動を示せる可能性がある。そして、過去の統計からいえば全体のわずか「3.5%」でも動くならば非暴力運動は成功したとチェノウエスは指摘します。

現在、「インド、ポーランド、ハンガリー、トルコ、ブラジル、タイ、フィリピンやアメリカ」といった国で「権威主義の興隆」があるといえます。「こうした国々、そしてその他多くの国々で、野心的な煽動政治家たちが、周縁化された人びとのための公民権保護を巻き戻したり、取り除いてしまったり、司法の独立を侵害したり、政敵を投獄すると脅したり、ジャーナリストを脅したり、圧迫したり、選挙や投票

の過程で大胆に攻撃したり、あるいは国内の敵対相手を武装自警団が攻撃していることに目をつぶったりしてきた」。

しかし、2010年～2020年は、有史上のどの10年よりも世界中で革命的な非暴力の蜂起が発生したとチェノウエスは指摘します。

ここで重要なことがあります。非暴力の成功の「多くの事例はニュースの見出しにはならない」。

大手メディアが繰り返し報道することは、むしろ、非暴力的抵抗運動の、逆です。メディアは二元論のすぐれた扇動手段を用いています。悪と正義、敵と味方に置き換えて理解できる報道がなんと多いことでしょうか。そうすれば視聴者は思考しなくてよいのです。プロパガンダ、イデオロギーに染まることができます。チェノウエス(2022)は、最近の非暴力抵抗運動の勃興とともに、圧力の増大についても述べています。そのうち現代の最も象徴的なものは、デジタルメディア戦略です。チェノウエスが述べるには、デジタルの時代は、「独裁政治家」たちに、「政敵」を監視、コントロール、分裂させる力も与えました。そして、デジタル・ツールを使って敵を黙らせ、プロパガンダや偽情報を広め、「敵の勢力の中での分裂や分断を引き起こし」ました。

しばしば、小さな記事には真実が隠れ、声の大きいメディア報道の中の洗脳は、考える力を奪います。たしかにキリストは二元論を用いてすぐれたたとえ話を話してもいます。優れた手法は、キリストではなくひとがひとを欺き独裁者が信仰者を扇動し欺くときにも有効です。

4. 平和が失われている戦場に

戦場、すなわち平和が失われている場は、ウクライナだけではありません。敵と味方と二分する考え方、平和が欠けている状態、すなわち、満たされた完全なキリストと天の父のような一致がかけた状態、イデオロギー、不正義、抑圧はこの日本のただなか、社会の中に、そして我々の心のうちに巣くっています。

4.1. 「よそ者に・・・」(マタイ 25 章 35 節)

国内におけるウクライナからの避難者とそれ以外の移民難民。多くのひとが、行政が、現在ウクライナ避難民を支援しています。ヴィザが発行されます。ひるがえって、父親が急逝、兄を頼って来日し、神戸でまだ10代で渡航、日本語学校に通い始め、朝も夜も懸命に働きながら、蓄えは一向に増えない生活が続けるバングラデシュのタルクデル・カウサルさん(現在20歳)から連絡を受けました。住居を行政に保証され、戦勝のために貯金を送金するウクライナの避難民とは対照的です。

ウクライナ人⁸以外の移民・難民を、まるで税金泥棒か、治安悪化の要因とみなし、自分たちの仲間である日本人と区別する人々が多いです。同じ人間です。聖書では異邦人をないがしろにしてはならないと書かれています。

今年、2023年6月9日、静かに入管法「改正」案(改悪案)が可決されました。難民・移民は自国へ強制送還される確率が引き上げられました。いわば日本人以外は生きるに価しない命とみなす優生思想です。日本国内において犯罪者のように収容され、のたれ死ぬがままにされています。外国籍であれば、の垂れ死ぬことに太鼓判でしょうか。いのちを脅かしてよいその根拠はどこにあるのでしょうか。

⁸ 入管は主にアフリカ人、アジア人、南米人に対して容赦のない収容をしている。最近ではイタリア人男性の入管施設内における自殺が例外的に報道された。

忘れてはいけない歴史的事実としてほかには何があるでしょうか。今年に関東での虐殺事件の100周年です。誰が、誰を虐殺した事件でしょうか。日本人たちが「一致」して、団結して、在日の朝鮮人や中国人を殺しました。当時の報道を信じて。毒を入れた敵として。うちとそと。敵として作り上げられたひとは、私たちの社会における寄留者、主が擁護するようにと何度も呼び掛けてきたキリストの友です。

敵の側と友の側、という二分法について述べました。国という線引き、国王という支配者に安定を求めるような行為は古代イスラエル王国時代にさかのぼる罪があります(サムエル記上8章6節～11節)。そもそも、戦争は国家間で起きるものです。国家の罪深い始まりについて、聖書にかかれています。主が戒めています。息子が戦争のために、とられるようになる、と。その戒めを聞いてなお、民は国王が支配する国家を求めました。その罪深い記録を知っていながら、私たちは、国同士という分断とその結果を無視しているようです。どちらの国の側に立つのかということではありません。どちらの国を、という二元論が、差別されても殺されてもいい側を生みだしています。

聖書に書かれた罪を知っている私たちは、キリストのように小さくされたひとの側に立ち真っ先に弁護すべきではないのでしょうか。神がそうしているように、友のためにも敵のためにもいのちをすてる「完全」を、体現すべきではないのでしょうか。

ほかにもどんな二元論があるでしょうか。うちとそとで分け隔て、「死んだって、どうでもいい」と私たちが、国家が、イデオロギーが定めた敵に、誰が、なにがあてはまるでしょう。この社会の敵と味方に分け隔てるイデオロギーにはなにがあるでしょうか。

4.2. 食べさせ、飲ませ、宿を貸し、着せ、世話をし、訪ねる

路上で暮らす、生活者がいます。5歳のときも私が17歳のときも、そのもとにいかなくていいと言った私の両親がいます。うちとそとの隔たりを、日常的に植え付けておいて、人権意識を鈍感にさせる影響がありました。8月3日の木曜日の炊き出しでは、三宮で生活している路上のかたCさんが、病気でした。ちょうど炊き出しの日にお見舞いをすることができました。良い行いさえ神が用意しています。そのかたを無視することにならなかったことは、神のあわれみです。キリストが手当てをしたという単語は、いつの間にか「いやし」と訳されるのですけれど、それは手を当てること、テラペウオーです。私は路上で生活をするCさんの肩に、手を触れました。手を当てる、手を触れることは誰にでもできる行為です。

「さあ、私の父に祝福された人たち。天地創造の時からあなたがたのために用意されている国を受け継ぎなさい。あなたがたは、わたしが飢えていたときに食べさせ、喉が渴いていたときに飲ませ、よそ者であったときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに世話をし、牢にいたときに訪ねてくれた」(マタイ25章34～36節)

ほかにはなにがあるでしょうか。忘れ去られている限界集落の被災地があります。この日本は何千億円という単位で弁償しきれない、自然とひとへの癒されがたい傷の原因を作っています。

4.3. 平和が失われた被災地で「石が叫ぶ」

聖書には、「いのちを選べ」(栗林 2017: 237) (「命を選びなさい」申命記 30 章 19 節) という命令があります(佐々木 2023)。いのちを選べという命令を聞くと、日常的な平和について考えを改めることができます。

日本各地の被災地で危機感を抱きます。防災再考の必要性和直結する(いのちを選ばない)この国の姿勢が被災地で垣間見えています。技術過信、原発をめぐる構造(島藺 2013)とよく似た、現代の「ニムロド」の存在とつくりあげられた権威(エクスーシア)による暴挙として、被災地のコンクリートダムが目に入ります。被災地をはじめ原発も、おそろしい蹂躪と搾取の構造です。東日本大震災において、やっと注目されることになりながら消された原発再稼働、放射能汚染水の放流、フクシマの帰宅困難区域などの問題も横たわっています。現代のダム技術は、かつての信仰の先達—たとえば田中正造—が述べた環境神学と相反します。聖書に照らし合わせれば、現代のダム技術は、(いのちを選べ)との言説に対し、むしろ、いのちを根絶やしにすることも可能にする技術ではないかと思われまふ。たとえば身近な生き物をあげても、コンクリートダムには、かつて春の小川と歌われるほどいた、めだかはもう住めません⁹。

生態系は確実に破壊されます。誇張ではありません。めだかがいなくなる環境は、その他の生き物の存在も脅かします。めだかを捕食していた生き物が息絶え、生き物のいのちは枯れはてます。

私は研究者およびボランティアという肩書で被災現場を毎月訪問します。被災地では、命が助かったあとで住む家を追われたひとがいます。故郷の山間部が防災と銘打たれたプロジェクトの元でコンクリートに埋もれていく状況があります。日本各地で静かに進行しています。経済至上主義と技術過信、それに伴う犠牲の構図状況と「人に寄添う防災」が合わせて語られていません。足元から気づかないうちに山林の生態機能が失われていること、主導するエクスーシア的な顔の見えない国家機関、生態の再生機能による有機的な防災の効力が失われていること、防災の実践的あり方のひとつとしての里山再生((社)神戸国際支縁機構の「田・山・湾の復活」(岩村 2022))や環境保護活動があります。

福岡県杷木(はき)松末(ますえ)、熊本県球磨川流域でも、ダムの建設工事現場に赴きます。杷木松末に、乙石(おといし)という地域があります。2017年の豪雨災害で被災しました。震災から3年が過ぎたころに筆者が初めて訪問した際、隣近所の顔なじみがいなくなったことを住民が語ってくださいました。「さみしい・・・うん」としみじみ述べておられました。住民のかたの実家があった乙石は、立ち入り禁止区域となりました。毎月訪問するたびに、騒がしい音とともに砂埃が舞っています。いつ通っても工事が継続しています。たった一人、立ち入り禁止区域に90代の女性がひとりで暮らしておられます。春先には庭にモンシロチョウが舞い、溪谷に横たわる軒先はさながら天国のように感じられます。手を延ばせば庭先から柿をもぐことができます。訪問するたび、家の周りから採れた

⁹ 保田茂氏は、現代の土木技術では直線の川ばかりが作られる。「これでは水の流れが一定化、さらさら水が流れるからメダカは住めないんです。昔の自然のこの蛇行した川には必ず、流れの速いところとよどみができて、よどみにメダカが住めるんです。自然の川に戻さないと、メダカは住めないんですね。土木の先生方とはとにかく海に早く流そうということで真っすぐした川ばかり作るのもメダカが死んだ一つの理由です。(中略)土木屋さんはこんな蛇行した川は作りたくないんです。蛇行した川の方ほど害は少ないんですよ。蛇行することによってあつという間に水が流れないので氾濫しない。流れは緩やかになるからね。真っすぐに流すから、いざとなったらどーっと濁流になっちゃうんですね。魚も住めないし。必ず水ってのは蛇行する。まっすぐに流れる川はないんです。魚が住んだら鳥が住める。そういう風にして生物は豊かになっているんですね。今の土木屋さんは、生物という概念が少ないんです。とにかく早く海に流そうとしている。絶えずまっすぐな川をつくるんですね。それではもう魚やメダカは住めない」(大阪大学吹田キャンパス「未来共生セミナー：ミツバチがいなくなる日本」)

果実や木の実で歓迎されます。夢の暮らしの中で、工事の騒音と洗濯物も干せないほどの砂埃が毎日繰り返されます。現在、2022年の終わりになっても、工事の目途は立っていません。それどころか、県に次の工事の引継ぎが決まりました。完成を予告する工事現場の看板は、日付が更新され続けます。90代女性の庭からは、河畔が削られた川、もはやコンクリートの塊となった殺風景が否が応でも目に入ります。



写真5. バベルの塔のように出迎えるダム(2022年7月19日)

河川を上流に上っていくと、状況はさらに大掛かりになります。バベルの塔のようなコンクリートと鉄筋固めの砂防ダムがこれでもか、これでもかと川をまたいで出迎えます。砂防ダムの裏側に回ると、すでに砂が溢れそうになっています。その奥の上流には砂防ダムがまた鎮座します。川の左右を見渡せば、痛々しい山肌、手入れのされないまま放置されている竹やぶが広がっています。竹は根ごとずり落ちています。ダムが出来上がっても、左右の森林が土砂崩れを起こせばどうなるでしょうか。結果は素人でも目に見えます。「バビロンのジックラトは、建設着工以来、歴代の王によって幾度か完成が試みられ、改修や補強も繰り返され」た(栗林 2017: 227)。「聖書の一節が連想される光景が広がっています。

被災地が打ち捨てられ続けています。日本全国で松末・乙石と同様の状況があります。防災研究では田中正造のような〈自然への奉公人〉(栗林 2017: 312)の実践が真剣に検討されていないように思われます。いや、筆者自身も含め、実践に手が回っていません。防災意識改革、地区防災計画・・・防災への実践は長年喚起され取り組まれてきました。転換と更新が必要ではないでしょうか。この国の各所において繰り返される搾取、その計画への抵抗、地道な日々の暮らしの中での河川の世話、森の世話が希求されます。筆者ら人間が行わなければ「石が叫ぶだろう」(ルカ 19 章 40 節)。いや、既に叫びだしています。2017年の松末では砂防ダムを尻目に巨石と土砂が地域の学び舎に雪崩れこみました。神の被造物——人間だけではなく人間外を含めた生命全体——のうち、最も小さくされた者の側に立つ視点の神学は、正しい言説を深堀することだけが求められているではありません。いま、プラクシスとしての神学が接続されるべき数あるもののうちの重要なひとつは、生態系の復興と小さくされた側を中心に社会を変革するアクションです。

戦場に平和をもたらすために、私たちは「血を流すまで」罪とのきびしい闘いを、みことばの剣を負ってたたかったことがあるでしょうか（ヘブル12章4節）。

在日外国人、在日の難民の改悪案通過、在日朝鮮韓国人差別と虐殺の歴史、くりかえされる大規模災害被災地における億単位予算のダム建設、自然破壊と故郷で生きる権利への抑圧。

戦場は、他人事でしょうか。自分たち、ウチがわではなく、敵とも認識していないあちらがわの問題でしょうか。敵、自分たちが愛さなくてもよいと思いきまされている人々の中に、キリストの隣人が、友がいます。

スライド 10: 平和をもたらす闘いはみことばの剣を持つ

うちとそと、敵と敵でない側を作り戦場とする場が、数えきれないほど隠れた戦場が日本にもあります。しかも、その戦場に平和をもたらすために、私たちは「血を流すまで」罪とのきびしい闘いを、みことばの剣を負ってたたかったことがあるでしょうか（ヘブル 12 章 4 節）。

在日外国人、在日の難民の改悪案通過、在日朝鮮韓国人差別と虐殺の歴史、くりかえされる大規模災害被災地における億単位予算のダム建設、自然破壊と故郷で生きる権利への抑圧。

戦場は、他人事でしょうか。自分たち、ウチがわではなく、敵とも認識していないあちらがわの問題でしょうか。敵、自分たちが愛さなくてもよいと思いきまされている人々の中に、キリストの隣人が、友がいます。

「あなたがたは、わたしが飢えていたときに食べさせ、喉が渇いていたときに飲ませ、よそ者であったときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに世話をし、牢にいたときに訪ねてくれた」マタイ 25 章 35-36 節

キリストのからだ、あるいはキリストの兄弟とは、最も小さくされた者です。〈もつとも小さくされた者のひとりにした（「最も小さなもの一人」）〉ことはすなわち〈わたし〉、キリストにしたことです（マタイ 25 章 40 節）。キリストの体が呻いているのに、呻きが届いていないのなら、私たちはおなじキリストのからだに属していません。

旧約聖書のほぼすべての巻中に登場する命令で、42 回以上登場する命令があります。すなわち孤児、寡婦（シングルマザー）¹⁰、寄留者（難民）を決してないがしろにしてはならないということです。これら最も小さくされたひとびとに平和をもたらす、完全に、分け隔てなく一致することが、私たちのすべきことです。

¹⁰ 新約聖書においても命令がある。「みなしごや、やもめが困っているときに世話をし、世の汚れに染まることなく自分を守ること、これこそ父である神の前に清く汚れのない宗教です」（ヤコブ 1:27）。

皆さん、敵とみなす二元論の報道には、まどわされないでください。あるいは、自分の内側にある線引き、思考停止にも、感性をときすましていきましょう。

皆さん。二元論にまどわされずに、キリストの平和を実現し、家族友人のためだけでなく、社会で、「敵」として、愛さなくてもよいとしたあげられた人々のためにこそ、命を差し出す決意をもちたくはないですか。

皆さん。命を捨てるとは、イデオロギーや大義名分の権力者のために命を捨て駒にされることではありません。ましてや自己中心の信仰に立って命を全うすることではありません。命を捨てるとは、本当は友である敵のため、敵にしたあげられた友のために、偽りの二元論、偽りのぬくぬくとした我々があぐらをかいている現状の平和をうち壊し、キリストの平和のために命を使い、自分のいのちを捨て代わりにいのちを得ることです。平和の実現とは私たちが命をかけて、差別を乗り越え、分裂していた欠けのあったところが満たされ、完全となり欠けないシャローム(平和)が実現されるということです。

結論 敵に仕立てあげられている友、最も小さくされた隣人とは誰か。平和とはキリストと弱い立場に一致し行動を起こすこと。

キリストの平和の実現とは、私たちが、私たちの社会が作り出している敵を、私たちの国民、家族、友人が作り出している敵を、私を愛してくれるひとが敵だといっている敵を、敵として認めないことです。私たちの隣人とはだれですか。最も弱い立場に置かれている人です。よく見極めれば、作り出された敵を攻撃する陰で、最も弱い立場に置かれた私たちの隣人が殺されることに気づくことができます。

キリストの平和の実現とは、〈敵〉と〈友〉という社会が作り出した二元論を、キリストのみことばの剣を持って、暴露し、最も弱い立場である隣人の解放のために行動することです。いのちをかけることです。

ロシア・ウクライナ戦争のみでなく中東、アフリカ、アジアにて、「カヨ子基金」では、現在進行中の戦争・災害のために抑圧されている寄留者、孤児、独居の高齢者、シングルマザー、「小さくされたひと」のためにボランティアを継続します。国や県から、ボランティアセンターから一銭も助成を受けず、権力におもねず、あえて市民の浄財によってのみ支えられることを決断しているグループです。小さなはたらきです。皆さん、ご協力できるかたはぜひ助けてください。

参考文献

エリカ・チェノウェス 2022『市民的抵抗——非暴力が社会を変える』白水社。

栗林輝夫 2017 西原廉太・大宮有博(編)『栗林輝夫セレクション 1 日本で神学する』新教 出版社。

佐々木美和 2023「<書評>栗林輝夫(著)西原廉太・大宮有博(編)『栗林輝夫セレクション 1 日本で神学する』『災害と共生』7-19。

島藺進 2013『つくられた放射線「安全」論 科学が道を踏みはずすとき』河出書房新社。

本田哲郎 1990=2003『小さくされた者の側に立つ神』新世社。

本田哲郎 1992=2000『続 小さくされた者の側に立つ神』新世社。

岩村義雄 2022「川と人間の相克と共生」『福音と世界』77(12): 30-35。

※本原稿中で用いる聖書箇所は、他の文献で引用された聖書箇所を除き、すべての引用文を、『聖書協会共同訳』(2018年日本聖書協会発行)から用いました。